



全国

第1位

2003-2007 年 合計特殊出生率 2.42
 2008-2012 年 合計特殊出生率 2.81

伊仙町は、名誉町民でもある泉重千代翁、本郷かまと媪など世界的な長寿で有名ですが、それと並び「子宝のまち」として名高い自治体です。厚生労働省「人口動態統計特殊報告」によると、2003～2007年の合計特殊出生率全国平均が1.31に対して、伊仙町は2.42で全国1位、天城町と徳之島町が同率2.18で徳之島3町が全自治体の上位3位を占めました。続く2008～2012年の統計でも、合計特殊出生率全国平均1.38に対して、伊仙町は2.81で全国1位をキープしました。

子宝の町・伊仙町
 「子は宝」を未来へつなぐ

これらの要因として、伊仙町をはじめ徳之島では「子は宝」と先祖崇拝の精神文化が根付き、家族や地域一体が子育てを応援し高齢者を大切にする精神基盤が存在すること、人生の大切な節目を、家族だけでなく知人・友人・近隣住民が共に祝う地域文化があり、血縁を超えた助け合い精神による高い地域力があることが要因と分析しています。

伊仙町の子宝を支援する取り組みとして、全ての妊婦が安心安全に出産を迎えるために、妊婦のニーズを把握したプレママ教室を実施しています。妊産期から母子栄養食品の支給を行い、乳児健診の機会を利用し、子どもの成長発達についての理解を深めるために、保育園、学校、教育委員会、各医療機関などと連携を図り、それぞれの特性や家庭環境に合わせた支援や相談体制の充実、疾病の早期発見・妊婦歯科健診を取り入れています。

また出産祝い金の充実、子ども医療費、学校給食の無償化、特色のある保育や保護者のニーズに対応する保育所運営の充実、放課後児童クラブの充実、子育て推進事業を用いての各種イベントを開催し、子育て家庭の負担軽減を図り、支援する取り組みも行っています。



～先人の価値観継承と 新しい価値観への挑戦～

H31 伊仙小学校運動会



H 30 鹿浦小学校運動会

伊仙町教育委員会では、施政方針に基づいた学校教育環境の充実と、学校職員の指導力向上のための各種研修会の充実を図っています。

東部・中部・西部の3中学校区で、小中連携部会を実施し、「家庭生活のしおり」の見直しや、研究授業をとおした研修による教職員の資質向上を図り、9年間を見通した子どもたちの成長を目指しています。さらに子供たちの実態を的確にとらえるために全小中学校の取り組みを有機的につなげ、学力向上推進協議会の体制を見直し、指導法の改善を図っています。これらの活動をとおして学校と行政が一体となり、未来を担う子どもたちの学力向上を目指します。

教育施設・環境の充実の面では、各校に電子黒板を設置しました。全小・中学校に校務支援ソフトを導入し、学校事務の効率化を促し、教職員が子どもたちと向き合う時間を確保していきます。



H30 面縄中学校体育大会



H29 鹿浦小学校農作業



H30 面縄小学校 劇団四季講座

また、国の施策による「GIGAスクール構想」により、児童・生徒に一人一台端末が整備されました。今後はオンライン授業や、デジタルドリル等の活用を促すための環境整備を進めていきます。そして特別な支援を要する子どもたちの一人一人のニーズに応じた支援を行うため、各校での校内支援委員会や伊仙町教育支援委員会においてさまざまな検討を進めています。

自然の営みに合わせた作物作りをとおして獲得された、自然の中での謙虚な生き方、自然の恵みへの感謝、地道な活動が夢を育てることなど、先人たちが残した生きる価値観の継承と、新しい価値観への挑戦を融合し、伊仙町の子どもたちが「Society5.0」の時代に対応し、夢をもち、自分らしく生きていけるよう、学校、家庭、地域、行政が一丸となって、子どもたちの学びを支える体制を整えることで、伊仙町の教育の充実・発展につなげます。



令和4年度より給食の無償化の実施

タブレット端末を活用した授業の様子



「長寿子宝の町・いせん町」 で生涯に渡る学びを支える

伊仙町の社会教育は、公民館、歴史民俗資料館、図書室、そして総合体育館などを拠点に、誰でも参加できる形で学びやスポーツの機会を提供しています。学校教育や家庭教育以外の学びの場として、「いせん寺子屋」や「親子チャレンジ教室」「徳之島のいろは」などを展開し、学業のみならず実際の体験、異年齢の交流、地域の伝統文化などを知り学ぶ機会を作り出しています。これは進学や就職で徳之島を離れる子どもたちに、生まれ育った故郷の自然、文化、人の繋がりや伝統を知ってもらい、故郷の良さ、強みを理解した上で時代の変化に対応できる人材に育てもらうことを目的としています。

また、行政と学校と地域住民が統合的に子どもたちの学びを支えるために、「伊仙町われんきゃ未来教育会議」を住民主体で組成し、その中で地域環境、家庭教育、生涯学習について協議し、学校との連携事業などをよりスムーズに行えるように取り組んでいます。外部からの講師だけではなく、地元にいるさまざまなスキル、経験を持つ方々を人材バンク化し、体験活動や人材育成、キャリア教育にも取り組んでいます。





R 2 第 68 回鹿児島県下一周
市郡対抗駅伝競走大会

歴史民俗資料館4階にあるサテライトオフィス横には誰でも自習できるスペースを設け、そこで学習支援員による補習や「東大ネットワーク」の遠隔授業も行い、学校外での学習の場を提供しています。体育・スポーツ分野においては、スポーツ少年団や社会人の各種スポーツ大会の開催、指導者講習会を実施し、伊仙町内のスポーツ活動推進に努めています。



R3 いせん寺子屋「感性を磨く」



R2 軟式野球卒業大会

待ちから攻めの図書室へ



伊仙町の公民館では、いつでも誰でも、どこでも学べる生涯学習の推進と町民の学習歴の活用を図り、町民が講師として活躍する公民館講座やニーズに基づいた生涯学習講座を実施しています。講座の内容においても趣味的講座だけでなく、教養的講座を積極的に計画しています。

特に生涯学習活動の一環として力を入れているのが読書推進です。誰もが気軽に利用できる図書室を目指して館内整備を進めています。児童室と一般室に部屋を分けて資料を配置し、それぞれの目的にあった利用ができるようにしました。公民館のロビーにも本や雑誌を配架し、利用者が手に取りやすくする工夫をしています。

また、季節のイベントとして「図書かんも〜れ」や「クリスマスおはなし会」、毎月の学童での読み聞かせ、保健センターと連携して3・4ヶ月の赤ちゃんにご家族へ本を手渡す「ブックスタート」なども引き続き取り組んでいます。また、令和3年からは新たな取り組みとして「移動図書館はこぶくKUKURU」での巡回がスタートし、学校を中心に町内の各集落へ本を届けています。同年6月からは、借りた本のタイトルや本の種類・定価が印字される「読書通帳」も導入し、子どもたちの読書意欲の向上につながっています。コロナ禍の中、よりよい公民館・図書室のあり方を日々模索しています。



集落で語り継がれる伝統文化

伊仙町には多くの伝統文化・芸能が現在でも息づいており、脈々と継承されております。犬田布地区に伝わるイッサンサンは豊作を祈願した餅もらい行事です。「イッサンボー」というわら人形をかついで、イッサンサンの歌を歌い、各家々を訪問して餅をもらいます。イッサンサンとはやり方が異なり、タネブシなどといった、豊作を願って歌を歌い家々を回る餅もらい行事は伊仙の他の地区でも行われます。そのほか十五夜など年中行事が残り、季節の移ろいを感じさせます。

さらに各集落で年中行事や学校行事などで様々な伝統的な踊りが披露されています。目手久集落では立踊り（八月踊り）が盛んに行われ、県指定文化財にも指定されています。上面縄集落では、シヨンマイカが踊られています。シヨンマイカは、大正時代に紡績工場へ出稼ぎにいった人々が本土の曲を八月踊り風にアレンジして作られました。西伊仙東集落では昭和のはじめごろ陸軍に入隊していた人が伝えた棒踊りが勇壮に披露されます。西伊仙東集落の棒踊りは町指定文化財にも指定されます。



「イッサンボー」というわら人形



十五夜・六調



棒踊り

そして各種行事や祝いの席で欠かせないものがシマ唄です。イッサンサンの歌や八月踊り歌、ションマイカの歌の他、伊仙町には数多くのシマ唄が歌い継がれており、ワイド節や六調は祝いの席の定番です。ハレの日を彩る歌だけではなく、田植え歌や弔いの歌など集落の普段の生活に密着した歌も歌い継がれ、伊仙町で暮らす人々の人生はシマ唄と共にあるといっても過言ではありません。

また行事だけではなく、普段の日常にも伝統文化は色濃く残り、町指定文化財に指定される振り茶は日常の語らいの場や来客のおもてなしに振る舞われました。一昔前、振り茶は徳之島のいたるところで行われていましたが、現在は伊仙町だけに残っています。

伊仙町内には、日常からハレの日になで伝統文化・芸能が残り、文化・芸能の継承の場が年配の方から若者・子どもまで交流の場となっています。



ションマイカ同好会



振り茶



上面縄の綱引き



大人の仲間入り
成人祝い

通過儀礼

人には生まれてから亡くなる一生の中で、人生の節目がいくつも訪れます。それは誕生に始まり、入学、卒業、成人、結婚、出産などの大きな節目、そして最期の死を迎えます。これらの節目ごとに人は新たな段階へ進んで行きますが、徳之島には、これらの節目を多くのの人々と共有する習慣が色濃く残っています。特に、誕生から成人になるまでの間に、名付け祝、入学祝、成人祝があり、大勢の大人たちがお祝いに掛けつけます。同時に最後のお別れであるお弔いにも数多くの人々が駆けつけ、そのあとも親族の手によって、ご先祖様として手厚く扱われ続けます。この伊仙町に今も残る、地域や集落で子供を見守り、みんなで育てていく「子は宝」の精神と「先祖崇拝」の心が、長寿と子宝の町の根源とも言えます。



出生祝い
名付け祝い





(幸山忠蔵氏 提供)

闘牛（牛なくさみ）

徳之島には、島唄や踊り、さまざまな年中行事など特徴的な文化が多く残されています。これらの伝統文化の中で現在も脈々と受け継がれているのが「闘牛」であり、この「闘牛」抜きに伊仙町を語ることはできません。

徳之島における「闘牛」の歴史は古く、江戸時代にさかのぼります。かつては「牛なくさみ」「牛オシ」「牛トロシ」とよばれ、農閑期や行事ごとの娯楽として農耕用の牛同士を闘わせていました。明治、大正、昭和と、徳之島の闘牛は盛況を極め、戦時中に一時中断したものの、戦後は「興行」という形で再興されました。現在まで島民に愛される催し物として継承されています。



(上木久一氏 提供)

面縄の浜の様子



徳之島闘牛のルールはシンプルで、勢子の掛け声とともに牛同士がぶつかり合い、先に相手に背を向けるか、逃げたほうが負けとなります。タイトルマッチは年に3回、体重別の4階級制で、無差別級のチャンピオンは全島一と呼ばれます。それ以外にも各地で大小さまざまな大会が開催されています。

平成24年10月には、闘牛大会開催に特化したドーム型の施設「徳之島なくさみ館」が開館し、さらなる闘牛文化の発展が期待されています。



©スタジオカガワクリエイト



©スタジオカガワクリエイト



©スタジオカガワクリエイト